

浩然

「思いやりを持ち 健やかで 確かな学力を
身に付け ふるさとを愛する生徒の育成」
香美町立村岡中学校通信
No. 4 2016. 7. 7 (Thu.)

挨拶で勝て！ 声で勝て！ 自分に勝て！

昨日、但中総体・但馬コンクールの激励会を行いました。各部の主将が力強く決意表明しました。そして、周りへの感謝の思いも素直に口にしてくれていました。

総体に出場する選手の皆さん、試合で、たとえ優位に立とうともおごることなく、着実に勝利を目指してください。たとえ劣勢でも、終了の笛を聞くまで決してあきらめず、1分1秒を大切に全力で戦ってください。ベンチとコート、会場が一体となって悔いの残らない試合をして欲しいと思います。

特に3年生の皆さん、入学以来2年数ヶ月のしんどい練習は、この最後の大会で「成果」を残すためにありました。「成果」って何？ そうです。勝つことです。個人的に私は、部活動の指導者時代、「絶対に勝つ！勝て！」と言いつけました。たとえ、力は相手が上であったとしても言いつけました。負けてもいいから、いい試合をしよう。自分たちの力を存分に発揮しよう、などとは言いません。それを出した時点で負けているからです。選手に「監督は負けると思っているんだな」と伝わるからです。だから「絶対に勝つ！」。でも、1校以外はすべて負けます。結果が出たあそこそが、実は指導者の真価が問われる時です。

勝つ、という成果。そして、もう一つは心の成果です。仲間としんどい練習に耐え、頑張り抜いた。仲間とともにチームのために、自分のために、最後まであきらめずに「やりきった！」という思いが大切です。この感情が自信となり、これからの生活に生きてくるのです。

長い人生、進路の不安や、生きる悩み、さまざまな壁や障害が現れてくることでしょう。そのとき、自分を支えてくれるのは、あの時、誰がなんと頑張った！ 何点差があっても声を出し続けた、倒れそうになっても負けそうでも最後の最後までボールを追い続けたという事実です。「やりきった！」という自信です。その気持ちが、一歩踏み出す勇気になるのです。だから、選手も控えもマネージャーも応援も、やりきってください。終わったあとに涙が自然とあふれてくるぐらい、やりきってください！ いつも全力で頑張っている人は、それを味わうことができる

ずです。強いだけでは勝てないのがスポーツ。最後の運やツキは、日常生活のご褒美です。Aあたりまえのことを、B馬鹿にしないで、Cちゃんとする人が、Dできる人。このABCDの原則を実践している人には、運も味方してくれるかもしれませんね。乞う、ご期待！



6/18 PTA教育講演会



マイ弁当の日



6/21 避難訓練・消火訓練



6/23 2年福祉体験



トライやる・美方ファーム

部活動・文化面の活躍

【但馬総合体育大会陸上競技大会】(6/15～16 豊岡総合スポーツセンター陸上競技場)

- ◎ 1年男子1500m 第1位 南垣 斗磨 4'51"26
- ◎ 2年女子100m 第2位 岸本 梨音 1'3"42
- ◎ 共通女子200m 第4位 岸本 梨音 2'8"40
- ◎ 共通女子1500m 第6位 西垣 佳華 5'22"21

【美方郡中学校女子バレーボール交流大会】(6/11 夢が丘中学校体育館)

- 《予選リーグ》 VS 香住二中 2-0 VS 夢が丘中 2-0
- 《決勝トーナメント》 1回戦 不戦勝
- 2回戦 VS 香住一中 2-0
- 決勝戦 VS 浜坂中 2-1 惜敗！ 準優勝

【美方郡中学校バスケットボール交流大会】(6/11 浜坂中学校体育館)

- ☆男子1回戦 VS 香住一中 37-56 惜敗
- 2回戦 VS 浜坂中 31-72
- ☆女子リーグ戦1回戦 VS 香住一中 20-80
- リーグ戦2回戦 VS 八鹿青溪中 18-63

【兵庫県小中学生書写コンクール】

- ☆県佳作 大林 未玖 田中 鈴 西谷 美音 西田 一步 (以上3年)
- 岡本 歩望 岸本 梨音 福井 若菜 (以上2年)
- ☆但馬入選 岡澤 菜南(3年) 黒田 季月 西井 友里奈 (以上1年)
- 岡沢 杏里 北村 芽生 西垣 佳華 西谷 奈純 (以上2年)

寄贈本の紹介「Beyond」(水谷 修・著)

香美町の元教育委員で、人権擁護委員の太田しづ子先生から本を寄贈していただきました。夜回り先生こと水谷修さんの「Beyond～雨の向こうはいつも晴れ～」(日本評論社・刊)を6冊。先日香住で行われた夜回り先生こと、水谷修さんの講演会に参加、感銘を受け、最新刊を購入、読んだところ「ぜひ中学生にも読んで欲しい」ということで、寄贈していただくことになりました。

早速、各学級に置かせていただきました。とても読みやすく、生きるヒントが詰まっています。ぜひ読んでみてください。



太田しづ子先生、ありがとうございました！

(文責：才田 覚)